

中学校における規範意識の育成をめざして

—学級の状態を把握し、人間関係を深め自尊感情を高める指導モデルの提示—

中大路 浩一

規範意識は、豊かな人間関係の中で他者や集団と関わることにより生まれるものとする。しかし、人と深く関わらない近年の社会的な背景は、子どもたちの「対人関係能力」を低下させることとなり、他者との関係の中で育つ「自尊感情」も高まりにくく、規範意識の育成に大きな影響を与えている。

そこで、本研究では学級の状態を把握するアセスメント・ツールとして「診断シート」を開発した。これにより、子どもたちの自尊感情や対人関係能力の状態が測定され、学級における規範意識の育成に効果的な教育活動が行えると考えたからである。更に、昨年度開発した道徳の時間・学級活動・体験的な活動をユニット化した「活動プログラム」と関連させ、具体的な指導と支援の在り方を提示した。

第1章 規範意識の現状と課題

第1節 現在の規範意識における問題点とは

我が国の規範意識は、「身近な人」や「周囲の目」を行動基準に置き、人間関係の中で育まれてきた。しかし、近年の経済発展による利益性の優先や核家族化によって人間関係が希薄化し、社会全体が私的空間化したことで、社会のモラルが低下してきていると考える。

更に、中学生の時期は規範に対する考え方が再構築される思春期であるために、一時的に規範意識が低くなる時期でもある。こうした中、規範意識育成の取組を、学校教育で行うことは重要であり、計画的かつ効率的に行う必要がある。

第2節 データから見る中学生の現状

中学生の規範意識についての現状を把握するため、研究協力校2校の中学生1730名に「自尊感情」「対人関係能力」「所属感」「安心感」の規範意識に関係する項目についてアンケート調査を実施した。その分析結果から、生徒たちは学年進行に伴って自尊感情が低下すること、対人関係能力が未熟で自己表現力が特に低いこと、友だちの存在が心の安定につながるなどが明確になった。

第2章 規範意識を育てる学級集団づくり

第1節 学級の状態を把握する

自己肯定感・自己有用感・自己効力感などの自尊感情が高い生徒は、規範意識が高い傾向にある。また、自己表現力・他者配慮力などの対人関係能力が高い生徒も、規範意識が高い傾向にある。更に、学級の居心地についても、規範意識の向上の大きな要因となっている。これらの要素を相互に作用させることで、規範意識を育てる取組が機能的に進められると考えた。そのためには、これら

の要素についての現状を正確に把握し効果的な支援をする必要がある。しかし、中学校では学級担任が関わる時間が少ないことや、自分を表現することが苦手な生徒もあり、学級の状態を的確に把握することが困難な状況である。

そこで、生徒の状態を客観的に測定するアンケート方式の「診断シート」を開発・提案する。既存のアセスメント・ツールと違い、質問構造を規範意識育成に特化させ、学級の回答状況を数値化し、学級評価については相対評価を取り入れた。この工夫により、生徒の規範意識に関する要素の状態をより正確に把握できると考えた。

第2節 診断シートを活用する

診断シートは、以下の四つの要素と9項目について、それぞれに学級の評価が出される。

(1) 規範意識の現状

・学校における行為 ・社会における行為

(2) 自尊感情の状態

・自己肯定感 ・自己有用感 ・自己効力感

(3) 対人関係能力の高さ

・自己表現力 ・他者配慮力

(4) 学級の居心地

・所属感 ・安心感

この学級の評価を活用して行う教育活動については大きな効果が期待できる。教科指導や道徳教育、生徒指導や特別活動などの学校教育全般に活用できるものであると考えた。

昨年度、規範意識を育てる取組として、「活動プログラム」を提唱した。これは自尊感情や人間関係能力の育成を重視して作成されたものであるため、診断シートと併用し活用する効果は大きいと考える。そこで、本研究の実践授業では、診断シートによる学級の評価を基にして、「活動プログラム」に指導や支援の工夫を取り入れた。

第3章 活動プログラムの実際と診断シートの活用

第1節 第2学年での活動プログラムの実践例

表1 協力校2年生における診断シートの評価

	規範意識の現状		自尊感情の状態			対人関係能力の高さ		学級の居心地	
	学校における行為	社会における行為	自己肯定感	自己有用感	自己効力感	自己表現力	他者配慮力	所属感	安心感
自学級(前期)	3.50	3.21	2.51	2.35	3.14	2.89	3.02	3.17	1.97
京都市平均	3.45	3.09	2.68	2.56	3.19	3.03	3.19	3.19	2.08
前期評定	C	B	C	D	C	D	E	C	D

①「文化祭」を核としたユニット学習 ～ソーシャルスキル・トレーニングの実践～

ユニットのねらい

相手の気持ちを理解し、相手の立場に立って物事を進めていこうとする態度を養う。

この学級においては対人関係能力が低く、生徒が行動に移す際に躊躇する可能性が高いと考えられる(表1)。その状況を改善するために、学級活動では「上手な頼み方」についてソーシャルスキル・トレーニングを行った。この取組により、生徒は人と関わる楽しさを感じることができ、文化祭での意欲的な活動につながった。

②「学級役員選挙」を核としたユニット学習 ～意見交流におけるツールの活用～

ユニットのねらい

学級の一員として積極的に生徒会活動や委員会活動に関わり、よりよい環境をつくらうとする態度を養う。

自己有用感を高めるためには、道徳での意見交流の中で「聴いてもらった」「認めてもらった」といった心地良い経験を重ねていくことが大切であると考えられる。付箋やネームプレートなどのツールの活用により生徒の考えを明確にし、意見交流を進めやすい雰囲気をつくる工夫をした。この取組から、生徒が意欲的に学習活動を進めることができ、積極的に委員会活動に参加することができた。

第2節 第3学年での活動プログラムの実践例

表2 協力校3年生における診断シートの評価

	規範意識の現状		自尊感情の状態			対人関係能力の高さ		学級の居心地	
	学校における行為	社会における行為	自己肯定感	自己有用感	自己効力感	自己表現力	他者配慮力	所属感	安心感
自学級(前期)	3.31	2.81	2.52	2.38	3.04	2.81	3.07	3.15	2.01
京都市平均	3.45	3.09	2.68	2.56	3.19	3.03	3.19	3.19	2.08
前期評定	D	E	C	D	D	E	D	C	C

①「奉仕活動」を核としたユニット学習 ～親和的な学級の雰囲気をつくる小集団活動～

ユニットのねらい

学級や学校の一員であることを自覚し、互いに尊重し協力していこうとする態度を養う。

学級の中で、生徒たちの人間関係を深めるためには、安心して発言できる雰囲気が必要であると考える。そこで、道徳の時間や学級活動の中に小集団活動を多く取り入れ、生徒に「話すルール」「聴くルールやマナー」のスキルを高める取組を行った。これにより、生徒が積極的に他者に関わろうとする態度が見られるようになった。

②「体育祭」を核としたユニット学習 ～生徒主体の話合い活動～

ユニットのねらい

互いの意見を出し合い、よりよい解決方法を見つけ出し実行していく態度を養う。

この学級においては自己有用感や自己効力感が低く、生徒主体での活動が進められていない状況であると考えた(表2)。そこで、生徒主体の話合い活動が行えるように、議事進行の事前に生徒と時間をかけて丁寧に打合せを行うなどの支援をした。この取組により、生徒は「自分たちで決めて自分たちで守る」という意識が高まり、ルールや約束事の大切さを考えるようになった。

第4章 規範意識を育成する環境をめざして

第1節 実践授業の成果と課題

実践前後の協力校2校の診断シート評価を比較すると、2年生は4段階、3年生は6段階のプラス変化がみられた。特に対人関係能力の向上が顕著に表れ、実践授業でスキル・トレーニングや小集団活動を取り入れた成果だと考えられる。また、診断シートにより学級担任が学級の状態を正確に認識し、教育活動全体で的確にマネジメントすることで成果がより大きくなったこともわかった。

第2節 深い生徒理解のための診断・分析システム

診断シートを学年会や校内研修会で使えるように改訂し、「調査」「分析」「取組」で構成される「HiYoCoシステム(How is your class condition?の略)」を開発した。このシステムを活用することによって、学級に関わる複数の教師の生徒観や指導観を一致させ指導することが可能となり、生徒への教育上の効果を向上させることにつながる。

このように「診断シート」を活用し、学級の状態を整えることで、生徒の人間関係は深まり、自尊感情は高まり、規範意識が醸成されると考える。